



行事紹介

花まつり(灌仏会)

今回は花まつりの内容や慣習についてご紹介します。お釈迦様の誕生日とされる四月八日に行われる仏教行事のことで知られています。花まつりとは、お釈迦様の誕生日を祝う行事のことで、灌仏会ともいわれています。一般的に花御堂の誕生仏に甘茶を注ぎ、甘茶を飲むことは知られているかと思いますが、そのように至った背景はご存じでしょうか。まず、花を飾るようになったのは、お釈迦様の生誕地のルンビニーの花園であったと言われているため、それにちなんで花を飾るようになったとされています。また、甘茶が使われるようになったのは、お釈迦様が誕生した際に頭上の龍が清らかな水(甘露水)を灌いだという言い伝えから甘露水に見立てた甘茶を使うようになりました。諸説ありますが、甘茶を飲むと無病息災に過ごせるという言い伝えもあります。ぜひ、ご近所にお寺がある方は花まつりに参加してみてください。

今月のことば

てんじょうてんげゆいがどくそん

天上天下唯我独尊

「私は天にも地にもただひとり尊い」とお釈迦様が誕生した際に口にしたと伝えられる。天地の間に生まれ出た一個のわれの命ほど、他に同一のものなく、これほど尊いものはない、つまり、一人ひとりの人間が尊い存在であるとされています。

普段はなかなか気づかない我々の生命の尊さに気づききっかけになる言葉になります。尊いものどうし、お互いがお互いを尊重し慈しみ合うことの大切さを教えてくださるお言葉です。自分のことを後回しにしがちな方が多いですが、たまには一息ついて自分自身を見つめなおし、誉めてあげるのもいいかもしれませんね。



コラム あれもこれも仏教用語

○億劫(おつくう)

「めんどろな様子」「何もやりたくない気持ち」を意味する言葉ですが、もとは仏教用語で「百千万億劫(ほぼ無限の時間)」の略になります。「劫」自体が極めて長い時間を表す言葉で、一劫は、例えば宇宙の始まりから終わりまでの時間や、巨大な岩山を百年(三年とも三千年ともいわれます)に一度降り立つ天女がその羽衣で一回撫でて、岩山全てが砂になるまでの時間ともいわれます。その途方もない時間を「百×千×一万×一億」するのとさらに意味を強めています。あまりにも長くて耐えられないことから、煩わしくて気が進まない様子の意味で使われるようになりました。もともとは「おつくう」と読まれていましたが、音が転じて「おつくう」となったと言われております。

はじめての仏教

○お釈迦様の出家

お釈迦様が生まれた際、高名な仙人によって「最高の悟りに到達するだろう」と予言されました。父の浄飯王は跡取りに出家されては困るとして、美しいお城や贅沢な衣装、様々な学問などあらゆるものを与えました。しかし十二歳のころに参加したお祭りや、土から出てきた小さな虫を小鳥が食べ、その小鳥を大きな鳥が食べてしまうという食物連鎖・弱肉強食の理を目撃したことで「この世に生きること、いつたいていどのような意味があるのか」と思い悩むようになってしまいました。

ある日、お釈迦様は城の外に散歩に出ます。この時東の門で老人に出会い老いがもたらすものを、南の門で痩せ衰えた病人に出会い病が避けられないことを、西の門で葬式の行列に出会い死は誰にでも降りかかる運命であることを知りました。ここで「老」「病」「死」、そして「生」の苦しみという人間共通の苦悩を目の当たりにしました。そして、北の門で出会ったのが清らかな出家修行者でした。お釈迦様はその尊い姿を見て、人間共通の苦悩を解決するには出家するしかないとの考えに至ります。これを四門出遊(しもんしゅつゆう)といいます。

父王はお釈迦様の出家を決して許しませんでした。しかし、梵天と帝釈天という古代インドの神々が手伝い、お釈迦様は二十九歳の時城を抜け出し、王子の地位も家族も捨て、真理を求める道を進むこととなりました。